Love Cherry～恋桜～

タトルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅ　Ｃｈｅｒｒｙ～恋桜～

【Ｎコード】
Ｎ０４４６Ｋ

【作者名】
タトルト

【あらすじ】
褪せても消えないこの想い、桜色の君と奏でてく

――僕らは
問いかけ多くの色に紛れて
――僕らは
答え探し迷いない音を響かせ
一つになる　　＞コンプレックスを
抱えた少年、少女が贈る桜色ラブストーリーです＜

プロローグ　～さくら～

自転車で進む道のり。
夕日が照らす茜色の光は土手に降り注ぎ、視界一杯の桜並木を照らしている。

綺麗だ。
不意にこぼれた言葉は誰に聞こえるでもなく、自分の感情をいっそう引き立たせていく。
昼間に見る桜や夜に見る桜もいいんだろうが、夕方に眺める桜もまたいい。桜の隙間から射し込む茜色は、見る人を幻想的な世界へと繋ぐ架け橋となってくれている。

静かに自転車を止めて、風に揺れる桜を見上げる。
見入ってしまうのは包み込むこの温かさと、どこか儚い脆さの責か…。
吹き抜ける風が運んできたのは桜のひとひらだけじゃない。刹那、頭を過る表裏一体なこの感覚はきっと俺はどこかで経験している。
どこかで……。

「……――――」

揺れる木々や花ばなの音に混じり、別に聞こえる音がある。

――――そっか、誰かさんのことか。

俺は一人納得すると声をころして少し笑う。声を出さなかったのは、珍しくさっきから寄りかかり寝息を出している誰かさんを起こさない為、きっと起こすと君はさぞ怒るだろから。

チラッと振り向き眺める君は気持ち良さそうに寝息をたてている。
……やっぱり似てるかな。

風に吹かれ、揺れるピンクと茜のコントラストは不思議な空間だ。
そして茜に染まり、風に揺られ、幸せそうに額を俺の背中にうめる君も。なんだか、君じゃないみたいで。

今、俺に見せている神秘的な風景を演じる桜も、きっと人に魅せる桜の輝きの一瞬でしかない。
それはきっと君も同じ。

気持ち良さそうに寝息を出す君を俺は初めてみる。また君の新たな表情。
まだまだ俺の知らない君はたくさんいる。

でも……それでいい。
見るものを魅力し、いつだって移り変わる桜の様に、どんな時だって、どんな表情でも、君が大切なんだから、少しずつでいい。今、例え俺に見せる君の姿が、君にとってのほんの少しの一面だとしたって、俺は――

額にかかる髪を払いのけると、眠りの中でくすぐったそうに表情は変わっていく。

桜の様に散っていく訳じゃない。一年かけて、また同じ場所へ帰ってくるのを待つ訳にはいかない。咲き誇る花のまま、君をずっと見ていたい。

二人は進みだす。

自転車をこぐ少年と荷台に乗った小柄な少女。

夕日が霞み、星が疎らに煌めきだす、そんな夕暮れ。

――
――――

出逢った僕ら
桜咲くあの日に

手のひらに落ちる花びらの様に
桜色に染まり震える心を
一輪残った消えない心を
輝く為に、輝かせる為に
失くさないで、忘れないで

たとえ君を見失なっても

――大丈夫――

思い出はいつか記憶となり
交わしたは今は心に灯る

形がなくても君をずっと想っているから

さぁ目を閉じてみようか、きっと世界は変わってくるはず

――うん。いい眺めだ

プロローグ　～さくら～（後書き）

なんとか＞Ｌｏｖｅ　ラブ　Ｃｈｅｒｒｙ　～恋のＬｏｖｅチェリー～＜、第一部を簡潔できるように頑張りますので、よろしくお願いします

01話

酔った……気持ち悪い。

とりあえず一つ大きく深呼吸。ゆっくり体に流れる空気は新鮮そのもの、目の前に映る景色は見慣れなく、歩いている人も、傾く夕日も違う世界にいるみたいに感じれて、まさに新天地だ。

感慨にふける影は茜色の空を眺め、ふらふら揺れながら進みだす。しかし凄い列車の揺れだった。景色なんて眺めてたんじゃ気もまぎれやしない。６年ぶりに帰って来たこの新天地なのに第一歩を大きく挫かれた。

新たなる旅路というのは緊張するもの。計り知れない不安と共に俺を蝕む緊張感。酔いも混じってとても不快。はぁ～、やだやだ。

高校進路を決める段階で、俺は両親に頼み込み昔住んでいた街に戻ってきた。
別に特別この街に凄い思い入れがあった訳じゃなく、戻って来たのには理由がある。……まぁその理由は後で説明しよう。

もやもやした気を取り直して駅から徒歩で目的地に向かう。
進む道のりに、連なる景色と昔の面影……
思ったより昔と変わってない風景になんだかホッとする。

安堵感は体調の回復に繋がったのか気分は良くなり、駅前の商店街を抜けて歩く事、数十分、目的の住宅街、そこの家に到着した。

とりあえず周りをキョロキョロ。挙動不審にみられるだろうか、だけどとりあえず入りにくい。……グズグズしていてもしょうがないので、とりあえず呼び鈴を鳴らそうか。

「はぁ～い」

チャイムの後、心地よい音と共に優しげな声が返ってくる。

「あ、慧君いらっしゃい、大きくなったわね～～」

出迎えてくれたのは俺の母親の同級生である、霞(かすみ)さん。
6年ぶりだけどこんな風に暖かく出迎えてくれて、しかも一目で俺と分かってもらえるのは何だか嬉しいな。

「今日からよろしくお願いします」

内心喜びながら頭を下げる。
幾ら親しくても最初は肝心だ。

「そんな畏まらなくていいわよ、今日から家族みたいなもんなんだからね」

この言葉に何だかホッとした。
緊張感も少し弱まった感じさえする。

「とりあえず、上がって上がって、慧君の部屋は2階だからね～～」

「はぁ～い」

とりあえず家を見つけて中に入る第一の関門突破。
けっこう不安だったんだよな……いろいろと。

だけど、霞さんと会ってみるとそんな心配もいらなかったのかなって安心する。

用意された部屋に入るなり荷物を置いてベッドになだれこむ。

真っ昼間だけど……疲れたし少し寝よ。

意識を手放すのに、それ程の時間はかからず

その後、長旅の疲れと共に俺は眠りについていった。

02話

気が付くと日が当たり明るかった部屋は真っ暗になっていた。

「寝すぎた……」

暗闇の中、手探りで携帯を確認すると、もう8時を過ぎていた。

どうやら霞さんは俺に気を使って起こさないでいてくれたみたいだな。

もそっとベッドから起きた俺は階段を降りて、1階のリビングに入った。

「あら、慧君おはよう」

「寝ちゃってましたね……」

テーブルのイスに座って、にこやかに笑っている霞さんと挨拶を交わす。

そしてその隣に女の子が座っているんだけど、もしかして……

「……澪か？」

「気付くのがオ・ソ・イ！　瑠璃垣（るりがき）澪（みお）だよ、　一目見て分かんないかな～～」

不満たらたらな澪を後目にとりあえず椅子に座る。

「いや～悪い悪い、でもあまりに変わってて分かんなかったんだよ」

ミオは俺がまだここにいた時に子供の頃からずっと遊んでいた幼馴染み。

親どうしも仲が良く、家も近かったからか、毎日の様に遊んでいた。

ちなみに1つ年下だ。

「ふ～ん、慧は私がどんな風に変わったと思うの？」

「え、え～と……」

確かに変わった。凄く可愛くなった。

霞さんも美人だからきっと澪も何時かは可愛くなるだろうな～って思ってたけど……俺の予想を遥かに越える程だ。

目もとくりくりたれ目にサラサラで綺麗な髪が絶妙にマッチしている。

ってか……マズイ。ここまで女の子っぽく変わっているなんて予想

外だ。このままだと俺……

「や、ヤバいは澪」

うろたえ始める慧。
その額にはやんわり汗が……

「え～そんなに可愛いの？」

満更でもなさそうに顔を綻ばせる澪。

……に対して

「違うって……ほら……例の俺の体質みたいなの」

「えぇぇ～私にまで反応しちゃうのって……どんだけ悪化してるのよ」

慧は震えていた。

ここで説明しておこう。
俺が転校まがいの事をした理由を……。

“女の子苦手症候群”
これが理由。
そして、俺が命名した病気名。

〈女の子苦手症候群〉
女の子に触れられたりすると全身に鳥肌や汗が発生したりする程に女の子を苦手とする症状、もしくはアレルギーではないかと考えている。どうやら幼少の時に比べて悪化している……ってか下手したら気絶したりする。

という訳だ。
人見知り何てのとは格が違う。完璧に女の子……特に俺と同年代ぐらいの女子を拒絶する。

「でもまぁ、その体質を治すためにわざわざ転校までしたんだからさ、私にも慣れる様に頑張らないとね」

「そりゃま、そうだけど……」

不気味に笑いながら話す澪に冷や汗だらだらな慧。

「でも嬉しいな……私に汗かくって事は私を少しは可愛いって思ってるって事でしょ？」

何故か顔を朱に染めて呟く澪。

「え、いや……」

確かに可愛い……けど認めるのも何だか俺が負けた気になるしな〜〜。

「……よし、気のせいだ……うん」

「って勝手に自己簡潔しないでよ！！」

「はいはい、とりあえず晩御飯にしましょう」

澪に怒られかけていた俺は霞さんの一声に助けられた。

ナイスタイミングです。

その後、とても美味しい晩御飯をいただいたり、風呂に入ったりして、俺は自分の部屋で寝る体制に入っていた。

その間、澪の俺への追撃（言葉攻め）が凄まじかったのは言うまでもない。

コンコン

そうこう考えていると、部屋の扉がノックされるのを聞いた。

扉からヒョコっと頭だけ出した状態で澪がこちらを覗いくる。

「言い忘れてた事があったんだ……おかえり堂本（どうもと）　慧（けい）君」

‘おかえり’　その一言がなんだかとても嬉しく感じた。

「……ただいま澪」

その後、澪はニッコリ笑うと扉を閉めた。

なんだかとても心地よい、そんな気がする。

これからの苦労など知るよしもない俺はそのまま眠りについた。

これから起こる波乱万丈な生活を予期してなのか

慣れない環境だからだろうか

その日の夜はいやに静かな時となり流れていった

03話

新天地、2日目の朝

窓の外から差し込む日差しによって目を覚ました。

何だかとてもすがすがしい。こんな気持ちは久しぶりだ。

今日は遂に入学式だからな〜〜

そして本格的にこの体質を治すため努力していかなくては。

とかなんとか思いつつ、携帯の時間を見て俺の跳ね飛んでいた心臓は一気に凍りついた。

「やっべー!!遅刻しちまうぞ、これ……」

とりあえず1階に降りて速攻で準備して家をでた。どうやら澪は学校に行っちゃてて、霞さんは……

「あれ?学校って明日からじゃないっけ?」

違いますよ……。

何はともあれ全力でチャリをとばす。

初々しい高校生特有の空気なんて感じている余韻すらない。

「……」

でも……焦りすぎた。

焦りと油断。スピードを出しすぎて進んでいた俺は前方右から来た自転車に気付くことが出来なかった。

そして……。

！！！ドシャ！！！

鈍い音と共に俺の自転車と相手の自転車はぶつかった。
普通ならこれで双方とも大怪我のはずだが、俺の方は何故か無傷。

凄く疑問に思ったが、そんな事より相手側が心配だ。

「大丈夫……怪我は？」

俺は自転車の陰に隠れて姿が見えない相手の方に向かいながら問いかけた。

「大丈夫……な訳ないでしょ！！　いったいどこ見て運転してんのよ！！」

――何て言うかその、可愛い

思わず言葉を失い、見とれてしまった。

そこにはどう見たって、身長１４？ぐらいな女の子がいた。

その少女は、トゲトゲしい言葉とは裏腹に子供の様な可愛らしい声、背が低いながらも細くスラッとした体の部位、少し茶色がかったふんわりとした長い髪、華奢な手足も細い肩も、少々怒り気味につり上がったパッチリとした眼も、長く綺麗な睫毛も。

――全てが可憐

しかも、自転車をこいでいた為かピンク色に染められた頬。

白を基調としてピンク色のラインが入った制服に、ピンクのひらひらスカート。

とどめに膝上まである黒のニーソックス。

全てが可愛く、とにかく小さくて

でも何故だか迫りくる……計り知れない威圧感があった。

そして……この娘を一目見た瞬間、今まで味わった事のない、まるで電撃が体の中に流れこんだ様な衝撃を受けた。

「す、すみません、急いでいたもんで……」

確かに俺も悪い自覚はあったから誤っておく。

「でも、あんただって注意力不足だろ」

一応相手側の方にも責任はある気がするし……。

「ハァ？……」

威圧的な、さも鬱陶しげな態度で彼女はこちらに視線を向ける。

その視線、正確に言うと迫力をはらんだ目つきの悪さ。

ははっ……膝が震えているよ。

「……もし私の自転車に“対衝撃吸収装置ハイパー”がついてかなったら、あんたも私も大怪我よ！！　感謝されるならともかく責められる事なんて無いと思うけど！」

「そ、そりゃ……そうだけど」

確かにこの娘の言う通りかも知れない。

俺は完璧に女の子の威圧感に負けていた。屈していた。

ってか“対衝撃吸収装置ハイパー”って何なんだ？

「さて……それじゃ、まだ動くあなたの自転車に私を乗せて、私の目的地まで自転車こぎなさい」

「な、何でそんな事……」

俺にだって学校があるんだ、そんなのんびりしてられない。

「私は被害者、あなたが加害者、文句ある？」

だ、駄目だ、こいつには逆らえない。

本能で解る。

小さい体から迫りくる、迫力、勢い、存在感、全てが俺に自由を許さない。まるで、狼に捕らえられた羊の様に……。

「あ、ありません……」

そのまま俺は彼女を後ろに乗せて出発した。

パッと見の第一印象は、洗礼された小さな容姿、そして高飛車で上から目線。

君の言葉によって遮られる俺の言論は無いに等しい物だと感じられた。

03話（後書き）

拙い文章ですが、これからもお暇な時に覗いて読んでいただけると本当に嬉しくおもいます。

０４話

高飛車な彼女に先導される事１５分。

途中で軽く道に迷ったりもしたが、何とか目的地に到着した。

「ったく何で道に迷う訳？　あんたバカ？それとも……バカ？」

いやいやでもでも、君の案内通りに進んだんだから俺の責じゃないでしょ。

そして二回もバカって言いやがったな。

「……何か言った」

小柄な彼女は呆れた様な鋭い目で俺を下から見てくる。

か、軽く恐い……。

「な、何でもないです」

……しっかしあれだな。
俺……この娘相手にまったく拒絶反応起こさないな。何でだろ……

そしてそして、到着するまで気付かなかったが目的地というのは俺と同じ場所。高校だった。

俺がその旨を彼女に伝えると……。

「はぁ？　あんた私の制服見て気付かなかったの？　やっぱ、あんた相当のバカね」

……君の容姿があまりにも小さくて分からなかったんだよ。

俺が小声でボソッと言うと、彼女の小さい耳がぴくっと反応してこちらを向いた。

「……何か言った？」

「い、いえ何も……」

ちょ、超絶地獄耳だ。

「まあ良いわ、それじゃ私行くから。また縁があったら会いましょ、じゃあね」

そお言うと彼女は小さく華奢な体を動かして走って行ってしまった。

「あ、ちょっと名前を……」

俺がそお言う頃には、あの娘の姿は自分のクラスを表で確認する生徒の群れの中に消えていった。

名前ぐらい聞きたかったのにな……。

まぁ、学校は同じなんだ。また何時か会えるわな。

人生ポジティブに考えたい俺は気分を切り替え、自分のクラスを見に生徒の群れに突っ込んでいった。

時は過ぎて、ここは教室。

学校の外で表を確認してみると、俺は1年3組。

この学校でいう所の1階の教室でなかなか奥にある場所。

教室の中に入った俺はというと、特に座席指定もされてなかったので、窓側後ろから1番目の席に座った。

……何故か都合良く空いてるんだよな。

さっすが主人公……かな？

そんなこんなで、そろそろ何かが始まるのか、皆が教室にぞろぞろ集まりだす。

とりあえず、暇だった俺は前の席に座っていた見ず知らずの男の子と話していた。

「俺の名前は真幌見祥吾（まほろみしょうご）。席も近い訳だしよろしくな」

「俺の名前は堂本　慧、こっちもよろしく」

お互いに軽い会釈。

この真幌見祥吾、気さくで誰とでも仲良く出来そうな雰囲気がある。
あと限りなく……イケメン。

……といよりかは、女子受けしそうなカッコイイよりか可愛い系の顔をしている。
髪もけっこう長く、中性的な顔をしていてパッと見て女の子かと間違う程に。

まぁ……どちらにせよ
軽く嫉妬してる感情は気のせいだろうか。

そんなお互いの自己紹介何かをしあっていると担任らしき人が教室に入って来た。

「ほらほら皆座れ～、全員いるか～～」
皆がみんな、空いてる席に座り始める。

「よぉ～し、皆そろってるな……」

ガッターーン！！

いきなりだった。

担任が今にも出席をとろうとする際に、誰かが扉を強く開けて入って来た。

「ハァハァ……ま、待ってください。まだ……ハァハァ……いますぅ」

「……えぇ～～」

俺は思わず小さく驚きの声を出してしまう。

その息切れしまっくている高く子供っぽい声に聞き覚えがあった。

「なんだ、入学式早々遅刻か？」

担任が怪訝な顔つきで問いかける。

「い、いえ学校には着ていたんですけど……道に迷って」

その学校でさえ道に迷う様なドジな所にも覚えがあった。

「……まぁ、いいだろう。とりあえず座れ」

「あ、ありがとうございます」

皆からの視線が痛いのだろうか。

ただでさえ小さな体を余計縮ませ、顔を真っ赤にしている。

その華奢な体つきや可愛らしい容姿にも見覚えがあった。

「えぇーと……あ！」

空いてるいる席が何処か探している最中に俺と目があった彼女。

何故か凄くこちらを睨みながら歩いて来る。
そんな誰もがひるむ様な異様な迫力も感じ覚えはあった。

「……よし、桜実（おうみ）　怜（れい）が来て全員揃ったな」

担任が告げる名前。……聞き覚えの無い名前。

“桜実　怜”

それが彼女の名前。

そんな桜実　怜は唯一空いてる席、俺の隣の席に腰を下ろした……
とさ。

余談

「なるほど……」

隣に桜実が座って、俺が物思いに耽っていると前の席のショウゴが後ろを向いて小声で話してきた。

「怜ちゃん……萌え要素満開だ！！」

……こんな友達と自己紹介しあった覚えも無いんだけどなぁ～～。

０４話（後書き）

この長い題名の小説、略してラブチェリに意見やご要望や感想などがあったらドンドンお願いします。

小心者なので暖かいメッセージなど待ってます。

それでは“あとがき”

以上でーす。

05話

時間が過ぎるのは早い。
あっという間の入学式。

そして各クラスに帰ってのホームルームもすぐに終りとなった。
早い早い、今日は初日だという事で午前中で授業終了らしい。

真幌見の祥吾と一緒に帰ろうと思ったが、あいつは昼から部活を見て回るらしい。

ご苦労な事だ、俺も一緒に見て回ろうとは思ったが……何かやはり乗り気になれない。

部活が面倒くさいというか……やはり居候の身だ、何か良いバイトでも探そうという気持ちが大きかった。

そんなこんなで祥吾とはすぐに別れて一人で自転車小屋に向かった

んだが……。

……直前、祥吾に言われて少し気になる事がある。

「あの萌え萌え怜ちゃん……たぶんお嬢様だ……」

「なんで、んな事分かんだよ？」

「俺の直感って言いたいとこだけど……あの桜実って苗字、確か大きな財閥の名前だ」

……まぁ、俺にはあまり関係ないけどな。

結局の所、俺は自転車で学校を旅立とうとしている。

ガコ、ガコ、ガコ

だけど……

ガコ、ガコ、ガガガガガ

あれ？　自転車の動きが悪い

ガガガガガガガクッ！！

っつか……引っ張られている。

後ろを振り向くと、そこには……ビックリだが何となく予想どおり、桜実　怜が小さい体で自転車を引っ張っていた。

「えーと……何か？」

恐る恐る尋ねてみた。

「あんた……自転車無い私をほったらかしにして帰るつもり」

ものスッゴいドスのきいた声で俺に言葉を発する桜実。

動けないカエルを睨む蛇のようだ。

そして桜実の返答は疑問系なのに、？マークが付いてない。ほとんど決め付けだ。

まぁ……実際、俺は帰ろうとしてたんだけど。

「え、え～とーーそんなー事はーーないーよ」

「言い方がスッゴい不自然なんだよぉ！！」

ブゥーーン！！！！

言うが早いか、風をきった効果音が出そうな程に強力な回し蹴りを桜実は放ってきた。

「おぉ！！！？」

ヤバい……っと思ったその瞬間

「あうっっ！！」

前方の桜実の姿が消えた。正確に言えば片足上げたまま、声と共に地上に落下していった。

どうやら１５０？ない桜実の身体では予想以上に俺の身長との差が

あったらしく、蹴りを空かしてしまったらしい。

「お～～い……大丈夫か？」

ほっとく訳にもいかず、しゃがんで声をかけてやる。

「う、うるさいわ！！　バカ！！」

桜実はそお強がってからも、なかなかぐったりとして立ち上がらない。

何処か体の一部を強くうったか？と心配した俺は

「本当に大丈夫か桜……」

と俺が本気に心配して声を発し終わらない内に

ぐうぅぅぅぅぅ～～～～～～～ぎゅるるるるるんんんん

地響きにも似た物凄い音がした。

これは、もしかして……。

「腹の……音か？」

コクコクコクコク

と桜実は頷くばかり。

「何か……食べに行くか？」

コクコクコクコク

これまた、顔も上げずに頷くばかり。

きっと恥ずかしさで顔は真っ赤なんだろう。

ここで何か言うのも辞めておこう。

話しがこじれるだけだ、うん。

あと、一つたぶん分かった事がある。何故に俺はこの桜実に拒否反応を起こさないか。

それはたぶん……こいつの普段の粗暴を見て女の子として意識してないからだな……うんうん。

そんなこんなで、俺は後ろに桜実を乗せて学校を出発しましたとさ、まる。

06話

場所は代わってここはファミレス。

何の因果か、正面にはスプーン1つを携えてビッグバナナパフェにかぶり付く小さな少女が1人。

小脇にはポテトフライとチョコ&チーズケーキを装備している。

「あの〜〜そんなに量……食べれるの？」

「……」

小さな口いっぱいにパフェ頬張りながらの無視。

「お〜い？」

「……ふぅ〜」

やっと一息ついて喋り始めるらしい。

口の周りいっぱいにクリームを付けたままでだが……

「だいたいあんたが私に余計なエネルギー使わせるからこんな事になったんでしょ」

余計なエネルギーって蹴りか？
蹴りからの横一回転を決めたあの流れか……。

「そして私を残して1人自転車で逃げようとしたのも悪い」

ジト目で言い放つ桜実。
んな事言ってもな……
あの場合はやっぱ帰るでしょ。

溜め息溢して水に手を付ける慧。

前を見るとこちらを睨み付けながらメニューをちら見する桜実。

まだ食うんかお前……。

そしてクリーム何とかしろ

「何とか言いなさいよ、バカ」

「とりあえず口の周りを拭いてくれ」

「……ちっ！！」

必死に口の周りを綺麗にする桜実。見ようによっちゃ中学生か、へたすると小学生。

っつか舌打ちしたな……こいつ。

「と、とにかくあんたは私を家まで送り届ける、そしてここはあんたの奢りね！！」

「そ、そんな！！」

じょ、冗談じゃないぞ……マジで。

なんで俺が……。

「じ・て・ん・しゃ！！」

「え、えぇ？」

「べ・ん・しょ・う！！」

マジかよ……

可愛い見かけとは裏腹に淡々とプレッシャーをかけてくる桜実。

「くぅ……しょうが……ない」

俺の財布君〜〜〜。

「情けない、男がパフェの1つや2つ」

居候の身にはキツイんだよ。

俺が1人葛藤していると、彼女はさっさと外に行ってしまう。

「ちょ、ちょっと待ってって」

「ほら、さっさと出しなさい」

「……はい」

本当に我儘だな……こいつ。

何はともあれ、やっぱ自転車は弁償しないとな。

はぁ〜、やっぱ何かバイト探さないと……。

０６話（後書き）

毎度毎度、話の長さが違ってすいません。

07話

舞い落ちる桃色の花
額に触れ鼻を霞める桜の香り

空に手をかざすと掴める花びらの数だけ、何か起きないかな……

バイト捜しもしたいのに、今はこの我儘な女の子をこいつの家まで送っている。

はぁ〜、しかしなかなか遠い。

春の陽気とは裏腹に額に汗が流れる。

こんな汗も後ろで鼻唄歌ってるこいつには知るよしもないんだが…

…。

「まだか……家？」

「もう少し！！キリキリ漕ぎなさい」

「俺さ、バイト探したかったりするんですけど……」

「いいから、漕ぐ！！」

ったく、何様のつもりだよ。

内心文句たらたらだが、パッチリ開いた鋭い瞳を前にすると何も言えない。

是非ともあなたの親と話してみたいもんだよ……本当に。

――それから数分

「あ！着いたわよ、ここよ、ここ」

「ここって……これ全部？」

そこには今、立っている場所から左右１００ｍはあるんじゃないかと思わるほどに長く、そしてまったく中身が見えないほど高い壁。

奥行どんだけ……。

「お、お前ん家どんだけ金持ち？」

何なんだ、この俺とお前の差は……。

僻み以外の感情、ほとんど持ち合わせないぞ。

「ま、これがあんたと私との大いなる差って奴よ」

無い胸を高らかに張って自慢する桜実。

おぉっと、なかなかの天涯絶壁だ。

っつかその冷めていて投げやりで妙に反抗的な態度辞めてくれ。

「……まぁとりあえず俺は帰りますね」

どさくさに紛れてひっそり帰ろうとする慧だが

「ちょっっと待ちなさい！！」

「ぐはっ！！」

桜実に首根っこを捕まえられてその場に卒倒してしまう。
まるで狼に捕らわれた羊の様に。

「まだ……何か？」

恐る恐る尋ねる慧。

「だ～れが帰っていいって言った！！　私の家はこれからが遠いんだから漕ぎまくりなさい！！」

侮蔑の瞳を向けてくる桜実。

「マジ……かよ」
その場で項垂れる慧。

そしてこれから今にも大レースが始まろうとしている。

またまた今度は数十分後

「さぁ～て到着」
「や、やっと着いた……」

ぜ、ぜ、絶望した〜〜。
広すぎるんだ！！
この家はよ！！！

見上げる先には天空高くそびえ立つお屋敷。
屋敷の周りの庭には大きな噴水を始めとして、よく手入れがしてあると見れる木々の数々がシンメトリーにズラリと並んでいる。
め、目眩が……。

もうヘロヘロな慧。
その場で深呼吸を繰り返す。
「なっさけない」
桜実からの厳しい一言。
単語ブッ切りで呟く桜実。
「お前、少しは……」
「お、お嬢様〜〜！！！！」
慧の話しを意識して途絶えさすように聞こえてくる呼び声。

お願いだから皆、人の話しはちゃんと聞こうよ……ね。

08話

そこには光輝くシャンデリア、壮大なレッドカーペット、そして……

「「お帰りなさいませ、怜お嬢様！！」」

カーペットを挟んで左右にズラリと並ぶ白メイドや黒執事。

空いた口がふさがらなかった。

「お嬢様！！一人で勝手に学校に行かれるとはなんたる事ですか！！」

「うるさいな〜〜、別に私に構わなくても良いって言ったでしょ」

「そんな訳にはいきません！！そもそもお嬢様は……」

俺は今、言いあいをしながら歩く2人の後を雰囲気で歩いている。

とっと帰ってしまいたいんだが、桜実の鞄は俺の手元にあり、しかも話しかけれる状況じゃない。

「何度も言わせないでよ！！いらないってば！！」

「そんな訳にはいきません！！お嬢様には学校への送迎は厳重装備のリムジン、学校内でもＳＰを付けていただかなくては」

後ろから話しを聞く限りでは、どうやら桜実は相当な家のお嬢様であり今日、朝に桜実とぶつかったのは勝手に家を抜け出た直後だった感じだ。

「だから……もうそんなのはうんざりなんだって！！」

いきなりの桜実の大声で場の空気が瞬にして静まりかえる。
今の桜実の表情はいつもの攻撃的な感じではなく、弱々しいもの。
何か言うべきなのかな……俺は。

「あ、あの～」
一応何か言おうと声を出してみたが……その後に何を言っていいか分からない。
そもそも俺に何か言う権限はあるのかどうかすら疑問だ。

「何ですかな？……っとゆうか貴方はどちら様ですか」

さっきまで桜実と言い合いをしていた初老のお爺さん執事が脚を止めてこちらを振り返る。

「えぇ～と俺は桜実の……」

「そ、そうよ！！彼は私の毎朝、毎夕の学校への運転手兼、学校でボディーガードをしてくれる人なのよ」

突然遮られた俺の言葉。
捲し立てる様にいい放つ桜実。

おい、おい、おい……マジかよ。

困惑する俺……そして桜実の勝手な発言に執事さんが了承する訳もなく

「そ、そんな勝手なことは……」
「勝手じゃないわ、私のことなんだから私にも決める権利があるわ」

「し、しかし……もし不足の事態が起きた場合、失礼ですがこのお方では対処しきれないと思われます、お嬢様のお身体も強くはないんですから……」

「だ、大丈夫よ、私も高校生になって体も強くなったし……しかもこの彼、空手の達人なのよ」

「いや……し、しかし」

何とか反論材料を探す執事さんだが桜実のデタラメ発言で全てそれ

が塞がれてしまう。

……っつかおい！！

俺は引き受ける何て一言も言ってないぞ！！

「あの……ぐぅ！！」

言葉を発しようとするといきなり桜実に足を踏まれ睨みつけられ遮られた。

仕方なく涙目で桜実にアイコンタクトを送ってみる。

慧→お前、適当な事を

桜→何、文句あんの。いいから黙ってなさい

慧→だけど……

桜→あの自転車の代金教えてあげようか、軽く１００万超えるわよ

慧↓！！

何故か通じてしまったアイコンを恨めしく思うと同時にそのまま俺は桜実のされるがまま黙り込んでしまった。

09話

小鳥のさえずりをこんなにも早く聴くのは凄く久しぶりだった。

翌朝、慧は律義にも桜実家の前で自転車片手に立っていた。

「眠い……Ｚｚｚ」

いったい全体何が悲しくて俺はこんな所にいるんだ。
本当に……ついてるんだか、ついてないんだか。

昨日、あれから無理矢理話しを合わせられた俺はなんだかんだで桜実のお抱え運転手兼ボディーガード……まぁ付き人？になってしまった。
断ろうにも凄い高価な自転車の弁償をちらつかされて、まったく駄目だったんだ。

しかし、しかし悪い事ばかりじゃない。
これから桜実の付き人を続けていけば自転車の弁償代金何てあっという間だし、その後も続て行けば普通のバイト何かより断然給料がいいんだ。

このチャンスを潰す事は無い。
……と考えた俺はとりあえず仮付き人みたいな様子見という事で2、3日桜実に引っ付いている事にした。

ゴゴゴゴゴォ！！！！

「……」

慧が自己完結の様な考えを巡らせていると桜実家の大きな扉が開き朝から不機嫌に見える桜実が現われた。

「よぉ桜実、おはよう」

「違う！！桜実では無く怜お嬢様、そして“おはようございます”と挨拶すんだ！！」

「あ……はい、すみません」
桜実の後ろから現われたのはこの屋敷の中の執事の中でもっとも偉い大橋執事長だ。

「まったく……君はまだ“仮”なんだからな、至らない所があれば直ぐに辞めてもらうからそのつもりで」

「は、はい……」

「それとくれぐれも安全運転。交差点では必ず徐行。ブレーキを多様すること。学校内でもお嬢様から目を離さないように、それから……」

この人は俺の事をまったく良い感じに思っていない。ってかむしろ嫌われてるかな。

「……はぁ」

朝から付き合っていられないのだろう。桜実の口から微かに溜め息がこぼれる。

少しぐらい助ける言葉とかないのか……おい。

慧の呆れる視線に気付いたか定かではないが、桜実の顔色がガラっと変わった。

「大橋うるさい！！お前も早く行くぞ！！」

突然の大声。

「大橋！！言ったはずだ、私に必要以上に構わなくていい！！」
吐き捨てる様に言った桜実は振り向きもせずに歩き出す。

「お、おい、ちょっと待てって」

桜実家を出発した2人。
桜実を後ろに乗せる形で慧は自転車をこいでいる。

「お前さ、あの言い方はないんじゃないか？一応執事長もお前の事を心配して…」

言葉の途中で慧を睨み付ける桜実。

「うるさい」

桜実の目に怯む慧、だが……

「はぁ～、良いよなお金持ち様はさ。リムジンで送迎、学校内でもSP付き、どんな我儘も許されるし……俺も金持ちの家に生まれたかったよ」

ズラズラと言い放つ慧。
この慧の態度に気を悪くしたのか、桜実の顔などんどん赤くなって

いく。

「うるさい、黙れ」

桜実の震えた声。
だが、今の慧はそんな事も気にする余裕がない。

「お前、その言い方は……」

「うるさい、うるさい、うるさい！！良い事何て一つもない！！お前に何が分かる！！」

絞り出すように言い放つ桜実。
初めてあった時に感じた可愛く優しげな印象を持たせる声とはまったく違う、誰も近よらせない、拒絶の意識を含んだ声だった。

「そりゃ全部は分からないかもしれないけど、少しぐらいは……」

「分からない！！誰も私の心の中なんて分からない！！分かるはずがない！！」

「……」

怒気を含んだというか、必死さの伝わる桜実の声に圧倒された慧は何の言葉も出せなかった。

「お前は私の運転手だ、それだけしてればいい！！」

……。

「そうかい分かったよ」

それからはずっと無言のまま学校に到着。
桜実は学校に着くなり自転車から飛び降りそのまま走っていってしまった。

１０話

朝の言い合いから半日。今は昼食終わりの５時間目。
あれから慧は隣に座る桜実と会話どころか目さえ合う事がない。
悪くないよな……俺。

俺に非は……ないと思う。朝だって勝手なこいつの言動や身勝手な考えに振り回されたんだ。
何が“良い事何て一つもない！！”だよ……。
お前の周りにいる人の気持ちさえろくに知らないでさ。

……でも、それだけじゃないとしたら。
なかったとしたら……。

隣に座る桜実に視線をさりげなく移す慧。

朝、こいつは……桜実は言った。

“お前に何が分かる！！”

必死に、悲痛に、何かを訴えるかの様に俺に言い放った。

もしかして……

もしかすると……

……ただ単に俺がこいつの事を分かってないだけ、周りが桜実を分かってやれてないんじゃないか……。

……桜実はまたこうも言った。

“分からない！！誰も私の心の中なんて分からない！！分かるはずがない！！”……と。

怒気の裏に見え隠れする儚さ。

微かに震える桜実の体と瞳。

全てにどこか弱々しさが、もろさが潜んでいる。

断片的に移る桜実の荒々しい姿はただの見せかけなんじゃないか……

苦しいんじゃないか……悲いんじゃないか……。

結局、それからは桜実の事を考えるばかり。

授業などに集中出来るはずもなく気付けば放課後。

隣に座る桜実。机に顔を俯いたまま動く様子がない。

大方の生徒が帰って行き教室にはまばらにしか人はいなくなっている。

いくら何でも帰らない訳にかないか……。

ガタガタと音を発てて机から立ち上がり荷物を持ち教室を出ようと

する慧。

隣で移動する慧の一つ一つの動作に軽いびくつきを見せる桜実。

「……はぁ～、ほら帰るぞ」

ゆっくりと顔をあげ、こちらを見る桜実を背にゆっくり歩き出す慧。

急いで後をついて歩く桜実。

何も声をかけれない、何か言わなきゃいけない気はするが、言葉が出てこない。

僕らの距離はまだ、今はまだ遠すぎる……。

知らなすぎる事が多すぎたんだ。

自転車での帰り道。
無言が支配する静寂の中で後ろの桜実に視線を移す。
夕日色に照らされる桜実。
普段の見せかけだけの強気。実際な内心に見える弱気。
知り合ってまだ日は浅いが考えれば考えるほど桜実に当てはまる気がしてならない。

お金持ち様の気持ち何て俺には分からないが、でも、まぁ……誤っておくくらいしとくべきなのかな。

「なぁ……桜実」
徐々に自転車のスピードを落としながら背中越しではあるが、桜実に声をかける慧。
「……何？」
自転車のスピードもだいぶ遅くなるほどの沈黙の後に呟かれる抑揚の無い言葉。

大きく深呼吸。

自転車を止めて後ろを振り向く慧。

「あの……あのさ…」

「あ、危ない！！！！」

「え……」

俺の言葉が途中で遮られて桜実の叫びが聞こえた直後、俺の頭に激痛が走る。

刹那、あまりの事に俺は何が起きたかさえも理解する事が出来なかった。

11話

「…はぁ、はぁ、、……くそっ！」

夕方、人気の無い路地裏。

壁に打ち付けた拳から鈍い音が場の静寂の中に響き渡り、同時に言葉を荒あらしく吐き捨てた。

徐々に視界が、ぼやけてくる。

拳の痛みは元の痛みを和らげてはくれない。痛みの根本を触ってみると、痛みと共に感じる生暖かさが分かる。血だろうな確実に。

数分前、空に響いた叫びは、次の瞬間生々しい打撃音に変わる。そこで世界はまるで止まったかの様に、鈍い痛みは一瞬で身体を駆け回り、俺の時を止まらせた。

痛みの衝撃は思考の停止へ。何も考えられなくなった数秒、妙に長く感じた刹那が訪れる。

目の前が真っ暗になりそうになった。

――でも。

視界にハッキリと写った女の子の恐怖の表情は俺の意識を戻し覚醒させた。

その直後、動かない、動けない桜実をひっつかみダッシュで近くの路地裏に逃げ込み、走って、走って行き着いた…いや行き止まりに追い詰められてしまった。

「くっそ…」

なんで自転車を止めた。
なんで振り返った。
なんで気付かなかった。

馬鹿だ、馬鹿だよ俺。これくらい予想できたのに、桜実ほどの金持ちなら襲われる事があっても不思議じゃないだろうにさ。

こんな時でも考えてしまうのは、これからどうするかじゃなくて、過去の後悔。
そんな事、考えている場合じゃないと分かっている。でも考えこんでしまう、矛盾を抱き、結局今、何も出来ていない俺は最低だ。

「もう…嫌……」

ぽつりと呟くと泣きながらそこに座りこむ桜実。

ごめん、ごめんな。
俺の責でこんな事に。

……そして、こんな時に何も出来ない俺はもっとダメな奴だよな、絶対。

いやに意識は冷静にはっきりした。自分を奮いたたせ、壁を背に崩れ落ちている桜実に背を向け路地裏に向きなおる。
相手は2人。
でも戦う、闘わなきゃいけない、恐いけど…さ。

震える桜実の頭に手を置いて軽く撫でてみる。
伝えたいことがあるんだ、お前に。お前だけにな。

震えて泣いている君を守りたい。ただその思いだけで、小さく座りこんだ君を見つめるだけで、君を助ける理由が――勇気が湧いてくる。

逃げる訳にはいかない。
行くしかないんだ。

震える足を引き立たせて、ただ突っ込んでいこう。
恰好なんか気にしないで、ただがむしゃらに。

―だって、それを今
俺が決意したんだから。

理由や言い訳なんていらない。君を守る意思の前には思考を必要と

していなかった。

▼

「もう…嫌……」

私は無意識の内に呟いていた。
何の自覚もないな私の思い。

まただ…また私は傷つける。
二度と、もう誰も傷つけない、巻き込まないと自分に誓ったのに……。

彼に甘えて、優しさに甘えて
君は離れていく。

柔らかな瞳と暖かな体温を私に残して……。

私の傍から離れていく。
ねぇ、お願い、お願いだから…離れないで。

嫌、辞めて……何で、どうして。

止めなきゃいけない。いけないのに…。

何で嫌だ、嫌だよ。

後悔する。

何で私は彼と関わった、どうして彼に甘えたんだ、と。

そして同時に無性に悔しくなる。

何で私は

桜実　怜

なんだろうかと。

12話

夕日に陰りが見え始める。
辺りは段々暗くなる。
春先だというのに空を雨雲が覆い被さり、いっそうな暗闇に。

コツ、コツと。
足音が響く路地裏。
「ハァ……ッ……ハァ……」
隠し様のない荒い呼吸をする少年。

辿り着いた先には座りこんだまま俯いている少女。

人が現れた事に気付いているのか、気付いてないのか。
少女の前に腰を下ろす、……慧。

「ごめん、ごめん……」

消え入りそうな声で

何回もごめんを繰り返す桜実。

泣きながら嗚咽が止まらない。

「……だ、だから嫌なんだ……金持ちなんて……」

嗚咽と共に涙が止まらず……だが一言一言紡ぎ出していく。

「……っ……良い事なんて……にもない。何処に行くにもＳＰ付……で、まともに遊びに何か……まったく……まったく出れない！！」

強い想いと弱い心。

何でこんなにも君は傷つかなきゃいけないんだ……どうして誰も1人も分かってやれないんだよ……

涙を溜めた瞳から零れ落ちる一粒の雫。

乾いた地面に落ちるそれを……手のひらで救うことは出来ないのかよ……。

「学校でも……そう、お金持ちの噂の……1人歩き」

一つ間をおき、大きく息を吸う桜実。

そして何年も何年も一人孤独に溜め込んだものを吐き出していく。

「私の周りが危険だと分かると……皆が私を避けていく！……友達も……っ……まともに作れ……ない」

本心からの気持ち。

強く強く言いはてる。

やっぱり周りが桜実を分かってやれてない……改めて感じる。

誰も分かってくれない辛さから人に冷たくあたる。

強がって……震えて、悲しんで。

「誰も……私の気持ちを分かってくれない！！！」

自分の心を吐き出した桜実。

瞬きする瞳には何が映っているのか、近くにいるような気がするのに……君の姿は儚すぎる、

それから数分。

何も出来ない、何もしてやれない、何も言ってやれない。

情けない自分が憎らしい。

身を屈め、震えて揺れる桜実の体。

小さく弱く映る姿、桜実……桜実！！

「どうした桜実！！」

「…ッ……ハッ……ハッ……ハッ…ハッ…ハッ」

徐々に、徐々にだが呼吸が早くなる。

おかしい、なんだ……！

そういえば、体が弱いとか言ってた様な……。

もしかして……“過呼吸”？

「いいか桜実！！ゆっくり息を吸うんだ、ゆっくり大きくだ！」

「…ッ…ス…ハッハァ…ハッハッ…ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…」

駄目だ、嗚咽が酷すぎて止まらない

……クソ！！

「……桜実！！」

……。

13話

何でだろう……苦しい。胸が締め付けられて息苦しい。

「…ッ…ス…ハッハァ…ハッハッ…ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…ハッ…」

そっか……過呼吸

……“過換気症候群”かな

注意してたのに、最近は全然なってなかったから……大丈夫だと思ってたのに

苦しい、苦しいよ

目眩がするし、軽く身体が痺れる

もう……嫌

———暗い、真っ暗な闇。

苦しいし、辛い……悲しいよ

なんで私なの

なんで一人なの

皆、置いていかないで

一人にしないで

全然平気なんかじゃない
寂しいよ、本当は……
何で誰も分かってくれないの

誰も知らない、誰もいない
また私は一人、暗闇に堕ちていくんだ――――

私の目の前が、意識が、真っ暗になりかけた……時

「……桜実！！」

……

不意に現実に戻された

「…ハッ……ッ…ハァハァ…ハッ…ハッ…ハッ…」

抱き寄せられた

彼が私を抱き抱えてくれた

「大丈夫だ……大丈夫。ゆっくり大きく息を吸うんだ……大丈夫、大丈夫だから」

彼は私に発作を押さえようと、優しく私を包み込み一緒に呼吸をしてくれる。

大きく、大きく、ゆっくりと

その彼の優しさが今の私には大きく突き刺さる。

大丈夫、大丈夫だからと

自分に言い聞かせているのか、私に言っているのかは分からないが

……

凄く凄く嬉しくて嬉しくて

私の視界が涙で歪んだ

あれからどれくらいの時間がたったのだろうか。

呼吸も収まり、辺りは……私の泣き声だけが支配していた

「あのさ……」

静寂を破ったのは私の声。

どうしてだろう、彼になら話していい気持ちになっていた

「中学の時とは違うって……高校に入ったら普通の生活が出来ると思ってた……友達つくって……遊んだりして」

呟く様にポツリポツリと

とても小さな声、ゆっくりとゆっくりと……

聞き取りにくかっただろうに、彼は何度もうなずいてくれた

「でも、でもね、拉致されそうになるし……あんたはボロボロになるし……」

また涙が出てきた

上手く言葉に出来ないけど……見上げて見た彼の心配そうな顔が

私の心を締め付けた

「ごめん、明日からはもう……しなくていい、私の責であんたにまで迷惑かけれない」

これ以上、迷惑はかけれない

彼の膝の上で抱き抱えられてて格好はつかないけど……

私は強い意思で言いきった。

ほんの少し、少しだけ寂しかったけどね……

でも……

「大丈夫！！」

彼は笑ってくれた

優しく、私に

「大丈夫、俺なら大丈夫だから、俺なら桜実を……怜を守ってやれる」

「……え？」

初めて…名前で呼ばれた

何でかな

どうしてだろう

誤魔化そうとしたって、何したって……

涙が止まらない、止まらないよ

「絶対死なないし、絶対へこたれない、全然迷惑何かじゃない！！」

彼の言葉が思いが一言一言が

私には……

「俺が友達になってやるし、どこへだって連れていってやる、一緒に行ってやる、お前の事を分かってやる……だから、だからさそんな寂しそうな顔するなよ」

「……」

駄目だよ、止まらないよ

そんな事言われたら

もう、わたし……

――

――

柄にも無い行動、不釣り合いな事を言っているのは分かっていた。

でも……

全身が震え俺の胸に顔を埋め泣いている

そんないつも以上に小さく弱く儚く感じられる君を……

ほっとく訳にはいかなかった

１４話

気付いてみると……

空には星
辺りは真っ暗

夕方の陰りなど一つも見えない
正真正銘の夜になっていた。

「ふぅ〜〜」

間の抜けた声。

私はさんさんと光輝く星空を仰ぐ。

いつ以来かな
人前でこんなに泣いたのは

彼の前で、彼の胸の中で思う存分泣いた。
今まで溜まっていた何か、それを全部吐き出せた気がする

「……ねぇねぇ」

今だに私を抱き抱えている彼に言葉をかける。
たくさん泣いた手前、やっぱり何だか恥ずかしい。

「……ありがとね」

何かを言わなければならないと思い、とりあえずお礼が始めに思い浮かんだ。

こんな一言じゃ伝えきれないけど、言っておかなければならない。
もっとも重要なこと。

至近距離だが、真っ暗な中だと何も見えない。

もちろんお互いの顔も。

相手の顔が見えないのは困るが、今の私の真っ赤な顔を見られないから逆にラッキーかな。

「あと、あとね……今度からあんたの事名前で呼んでも……いい？……ね、慧？」

すっごく恥ずかしい。

たぶん顔はトマトの様に真っ赤なこと間違いない。

だけど、どうしても名前で呼びたい。一緒にいてくれると言ってくれた、内に秘めていた辛い思いを伝えられた人だから。

「それとね、それとね、もう手を離して欲しかったり……？」

何だかホッとする体制だけど……いつまでもこのままじゃね。

まぁ……やっぱり本音は今更だがそろそろ恥ずかしくなってきたからだけど。

「……？……慧？」

おかしい……反応がない。

そもそもよく見えてなかったけど、けっこう前から反応がなかったり……

「ちょっとけ……

軽く揺すってみたら、こちら側に倒れてきた。

……え、ちょっと待って

「慧！！しっかりして！ねぇ！」

凄い汗、軽く震えて……気を失ってる。

何で、どうして……

その後、何度も何度も名前を呼んでも……

……私の声が君に届くことはなかった

１４話（後書き）

もう終盤、ラストスパートです

最終話

誰も君を分からなくても
俺がそこから救い出してやる
“約束だ”

遠退く意識にこの言葉、想いだけが俺の心にいきざんでいた

「……あ！！やっと目覚ました」
「……え？」
気付くと見上げる先には桜実。
慧はベッドの上で包帯まみれになっていた。

確か記憶ははっきりしないんだけど、桜実と帰っていて……襲われて……過呼吸で……だ、抱きしめた？のかな。

だけど恥ずかしい事まで思い返してみても何処で意識を失ったか分からない。

「本当にびっくりしたんだよ、何か分からないけど突然凄い汗かいて意識失ったから……」

汗ねぇ…んー…あぁ……何となく理解した。

「怪我が酷すぎたのかと思って…」

「いや、うん…まぁね……」

「何よ……そんなんじゃ分かんないじゃない」

話したくないんだけどな、格好つかないし。

それでも桜実は追求を辞めないので渋々慧は自分の体質について話した。

「え……何それ。男2人を倒す程強いのに、女の子に弱いなんて……格好わる」

グサッ！！
突き刺さる。桜実の言葉が慧の小さなハートを貫く。

「でもでも今は私を見ても大丈夫なの？」

少し拗ねた感じで桜実は聞いてくる。

そう、あの時確かに桜実に……怜に女の子を感じたんだ。あの桜実の姿、生きざま、心意気に……。

あの時感じはした、感じたんだけど……だけど……。

「まぁね、至って普通な桜実には女の子の欠片も感じな…」

「……なにか言った」

「な、何でもないです！はい！」

凄んで言い放つ桜実に怯える慧。

いつものやりとり
いつもの桜実
でもどこか違う……
何でかな……桜実がいやに優しい様な気が……

「ねぇ、その……いいよ」

慧が考えを募らせていると桜実がいきなり喋りだした。

「…何が？」

「だから……もう！わざわざ言わせないでよ！　あんたの“女の子苦手症候群”だっけ、克服するの少しは手伝ってあげてもいいって言ってるの」

「え！？本当に？」

「でもいい？勘違いしないでよ。べ、別にあんたの為にやるんじゃなくて私の執事として困るからやるんだからね！」

少し顔を赤くさせながら早口で話し並べる桜実。

分かりにくいけど、これも桜実の優しさの表しなのかもな。

「あと、あとね……」
続けて俺の寝ているベッドにゆっくり近づいてきた桜実がもじもじと言葉を紡ぎ出した。
「あんたは私の傍に……慧は私、桜実怜の傍にいてくれるんだよね？」

流れる優しい風
桜色の想い
一瞬に、一緒に2人は包まれた

「もちろん……約束するよ、怜」
慧の答えに満面の笑みを見せる桜実……いや、怜。

そう、俺は怜を守る。
その理由はお嬢様だからか？
それとも…
……考える間もないか

その理由はお前が“怜”だからだよな

ここでピンク色の世界で怜をずっと見つめている慧に一言

「言っとくけど執事としてだからね、そこんとこ勘違いしないように」

何でかな、分からないが思わず笑みがこぼれる。

「分かってますよ、お嬢様」

「分かればよろしい」

この時、この桜色が続いていってくれたらどんなに幸せかな。

ずっと続きますように…。

「あ、あとさっき聞いた話を言い忘れてたんだけど……あの私達を襲った男達、慧の実力をはかる為にこの屋敷最強執事長の爺に雇われてたらしいよ」

……。

こんなんだとさ、やっぱり幸せは程遠かったりするのかな……

うん。

――

――――

悲しい時や辛い時、そして寂しい時
いつでも逢いたくなるし
君の笑顔でまた、元気になれる

どれだけの時が過ぎ流れても
誰も君を分からなくても
ずっと想い続けあえる

“そんな存在”

続いていく

繰り返す
桜色に染まる
２人の日々

最終話（後書き）

ここでとりあえず《Ｌｏｖｅ　ラブ　Ｃｈｅｒｒｙ～恋のＬｏｖｅ　チェリー～》は終了です。
ありがとうございました、またよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0446k/

Love Cherry〜恋桜〜

2011年10月9日21時50分発行